

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 横山 知恵

論 文 題 目

軍記物語における救済と教訓

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 塩村 耕

委員 名古屋大学教授 阿部 泰郎

委員 名古屋大学准教授 大井田 晴彦

【本論文の概要】

本論文は『平家物語』と『曾我物語』とを取り上げ、軍記物語における、女人往生などの救済の問題と、因果応報思想に基づく教訓や誠めの問題を考察する。なお、『平家物語』の諸本は語り本系と読み本系に大別され、それぞれに多様な本文が伝えられるが、本論文では、読み本系のうち、最も古態を存するとされる延慶本を研究対象とする。また、『曾我物語』は真名本系と仮名本系に大別されるが、真名本を研究対象とする。

前半では『平家物語』を扱う。第一章は、藤原通憲（信西入道）の孫で、清盛によって高倉天皇后宮より追放された小督に関する延慶本独自の記述について、史実を参照しつつ検証し、その行動に〈家〉意識があるとする。更に延慶本にのみ見られる追放の後日譚に、大原の地での往生が語られることから、信西入道の孫である阿波内侍の存在を媒介として、建礼門院の女人往生物語を暗示導入する役割を見る。第二章は、延慶本における女人往生の物語を考察する。特に小督と建礼門院の往生を取り上げ、それぞれが経験した悲劇や逆境を、出家の契機となる「善知識」として捉える姿勢を指摘し、それが物語全体にある救済の主題へとつながる論理となっているとする。第三章は、平家の側にあつて、「驕り」を自覚する人物として重盛、二位殿、建礼門院の語る言説を検証する。単に「驕り」を批判するだけでなく、「驕り」を自覚し自らそのことを語るという場面がことさらに描かれており、そのような「驕り」の自覚が物語を展開する要素となっているとする。第四章は、延慶本終末部の「人ヲバ思悔ルマジキ物也」を、冒頭部に呼応するもので、延慶本作者の意図を示しているとし、「あなどる」とその類義語「あざむく」「あざける」などの語義を、用例を挙げて検討した上で、「あなどり」を「驕り」とともに重要な誠めの対象としたとする。

後半は『曾我物語』を扱う。第五章は、曾我兄弟の兄、十郎の恋人大磯の虎が、十郎の死後、諸国を廻国する過程でさまざまな人と邂逅するという真名本独自のモチーフに着目し、虎には各地で出会った人々を教化救済する宗教者としての性格があり、それによって自らも救済され、往生を遂げるという構造があるとする。第六章は、万寿御前（北条政子）と頼朝、曾我兄弟母と曾我助信の二組の結婚を中心に取り上げ、女性の〈家〉に対する帰属意識の推移を分析し、女性の父や舅の〈家〉意識とも対比させて論じ、〈家〉の存続という問題が物語の重要な要素となっていることを示す。第七章は、頼朝の統治する「さしも怖ろしき世の中」となり、母も異母兄も敵討を阻止しようとするのに対し、曾我兄弟が亡き父への「報恩」という自らの意志を貫き、命を散らしていった行為が、物語の中でどのように解釈されたのか、〈家〉の存続の問題と絡めつつ論ずる。特に頼朝が自分の敵の孫でもある五郎について「男子の手本」とまで高く評価し、一時は助命をも考える態度を見せたことに注目し、真名本作者の敗者への寛容な視線を指摘する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文の特徴は、延慶本『平家物語』と真名本『曾我物語』を研究対象として、重要な主題の一つである女人往生や救済の問題、そして誠めなど教訓の問題に着目し、特に女性の視線から読み解くことによって、新たな作品の読みを提示しようとする点にある。また、その観点から、諸本の中での延慶本や真名本の表現の独自性をも考えようとしている。

中世日本で独特の発展を見せた軍記物語の多くは、勝者や英雄を賛美する叙事文学ではなく、敗者に多くの筆を費やすことに特徴がある。論者は研究史上、あまり重視されてこなかった女性に焦点を当て、闘争後も生き残る、敗者の側の女性たちがどのように描かれているかに着目する。彼女たちが父や夫（ないし子）の菩提を弔いながら自らも往生に至る、その後の余生を取り上げることが、物語に登場する人々の救済につながるという構造の指摘や、これら女性たちが、自らの見聞にしたがって、誠めを語る語り手として、物語の重要な役割を担っているとの指摘は重要である。また、女性たちの〈家〉意識を取り上げることで、物語における〈家〉の問題の解明をより深めている点も評価される。

第四章「延慶本『平家物語』における誠め」は、「おごり」とともに「あなどり」を誠めることが延慶本の重要な主題の一つであるとし、末尾の「人ヲバ思悔ルマジキ物也」の一文に冒頭部と呼応する重要な意味が隠れているとする。たしかに「あなどり」の問題は、そもそも軍記物語とは何かを考える、重要な論点に発展する可能性がある。「あなどり」に着目すると、平家は清盛らの源氏に対する「あなどり」の報いを受けることが繰り返し語られており、同時にその「あなどり」によって助命された頼朝が、周到に「あなどり」を避けて、平家を滅亡に至らしめたことも語られ、それは「あなどらない」ことと「不寛容」や「忘恩」が裏腹の関係にあることをも意味しており、物語の複雑な性格を示唆しているように思われる。

もっとも、本論文には弱点も少なくない。延慶本『平家物語』と真名本『曾我物語』は、ともに寺院において作成された本であるが、寺院に由来する宗教的特性（唱導性）についての問題意識が希薄であること。説話文学や教訓書など、軍記物語以外の分野への言及が不足していること。延慶本と真名本に特化しながら、他本に対する、それぞれの本の独自性の指摘が、いまだ限定的であること。史実と文学的叙述との区別の付け方が時に混乱しているように見えること。取り扱う箇所や論点に重複があること、などである。が、それらは今後の課題とすべき点ないし瑕瑾であり、本論文が、そもそも軍記物語とは何かという大きな問題に発展する論点を多々含んでいる点は高く評価できる。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。